

斐芝嘉和

表紙イラスト:SAIPACo.

仙獄学艶戦姫

インビテーション!



試し読み版

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『仙獄学艶戦姫ノブヒデッ！ 前編』
『仙獄学艶戦姫ノブヒデッ！ 後編』
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫

『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 第一次水着大戦』

『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐 北宮学園生徒会長選挙戦』

『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参 信玄、出陣！』

(キルタイムコミュニケーション刊)

とともに読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



仙獄学園戦姫

ラブビデス!

斐芝嘉和
表紙 / SAIPACo.

登場人物紹介

Characters

おだ きりこ のぶひで
織田〈希莉子〉信秀

西開学園の生徒会長。第一次水着大戦の暗殺騒動で重傷を負い、現在は意識を失っている。持っている超能力は〈生体スタンガン〉。

ルイス〈キャロル〉フロイス

聖ジョウント学園に潜り込んだ「マレビット」のひとり。超能力〈ナイトメア〉を使い、信秀を狙う。

ゆらり、ゆらりと――。

螺鈿細工に象嵌された瑪瑙のような静寂の中、幾千回も反響した蜂蜜色の自己が帰納的に増殖し、侵蝕し、褪色し、幾重にも分裂した幻影が重なり踊る漆黒の夢幻――墜落感を伴った全身麻酔特有の闇をあてどなく延々と漂い続けていた織田（希莉子）信秀は、

「……？」

唐突に、世界を得た。

ここはどこだ？ なにが起きている？

私は確か、〈時逆〉の能力で先送りしていた瀕死状態に陥り、女子寮内の医療棟で治療を受けていたはず――混乱しかけた思考を一旦保留し、臉を閉じる。

直近の記憶は激痛の嵐、ただしそれも知識として「痛い」と感じているだけで、実際にはプラスチックの塊で全身を撫で回されているような感覚だった。麻酔が効き、痛覚だけでなく意識そのものも朦朧としていたのだ。

しかしいま――「痛み」はまったくない。

目に映った光景も、病室や手術室ではない。

これは夢か、現実か――先走る気持ちに脇に追いやり、

（右手小指……動く。右手薬指……動く……）

左右の手指、左右の足指の機能を順繰りにチェックしていく。どんな状況でも平常心を

取り戻せるようにと編み出した、自己流のフィードバック法だ。

身体に異常がないことを確かめているうちに、知らず知らず速まっていた脈拍が通常レベルに落ち着いた。ついでに服を着ていること、眼鏡をかけていることも確認して、

(……これは夢、ですね)

自身が置かれた状況に保留していた判断を下す。

夢であるなら目覚めた場所が病室でないのもおかしくないし、いつの間にか制服を纏い、座り慣れた椅子に腰掛けていたのも不思議ではない。

(それにしても……不思議な夢だこと)

明るさに慣れた目を、慎重に、ゆっくりと開く。

そこは——西開^{せいかい}学園の生徒会長室だった。

常日頃から様々な問題に頭を悩ませている信秀が、もっとも落ち着ける場所。六畳ほどの広さの機能的な執務室は、就任以来、ひとりでじっくり考えたいときにだけ使うようにしていたから、他人と一緒にいた記憶はない。

なのに、いま——机を挟んで対面に、ひとりの少女が微笑みながら静かに佇んでいた。桃色の髪をショートカットにした、リスのようにクリクリとした瞳が愛らしい、小柄童顔の美少女だ。

知らない顔、だがその服装はよく知っている。

7

どことなくゴスロリチックな、聖^{セント}ジョウント学園の制服。

現実ではなく夢なのだから、普段他人を入れたことのない部屋にだれかがいても別に不思議ではない——のだが。

まったく知らない人物というのは、やはりおかしい。

「ええつと……貴女は？」

意識しないと起動しない警戒心——麻酔の影響なのか、頭も身体も気怠く重い——を意識的に掻き立てながら、小首を傾げる信秀。長い髪がサラリと揺れ、艶々と輝きながら黒いブレザーの肩から胸へ流れ落ちる。

（あら？ 夢にしてはかなり精密な再現性ね……）

普通の夢とは違うらしいことを頭の隅にメモしていると、

「やあねえ、忘れてしまったの？ ルイス（キャロル）フロイスよ、希莉子ちゃん」

苦笑する少女に、記憶が引つ張られそうになった。自覚した信秀は心に楔を打ち込み、超能力による精神干渉を受けているのだと明確に意識。

そう、これは攻撃だ。

超能力者は普通の人間より精神干渉に対する耐性が強いが、相手の能力が強ければ防ぎきれないこともある。第一、いまの信秀は瀕死の重傷を負って治療を受けている最中。全身麻酔によって脳機能が低下すれば、易々と侵蝕されてもおかしくはない。

(それにしても……だれ？ 目的はなに？)

油断なく身構える信秀に対し——ルイスと名乗った少女は、不意に微笑みを掻き消した。焦げ茶色の瞳が、ガラス玉のように無表情になる。

「ふうん？ 噂には聞いていたけれど、なかなか手強いようね。幼馴染みだつていう偽記憶を植えてお友達になろうと思っただけけれど、ちよつとムリみたい」

「……早々に手の内を明かしていただけなのは、敗北宣言ですか？ それとも、もつとほかにも様々な手段があるわよという自信の表れかしら？」

時間稼ぎのために質問しながら、信秀は相手の能力の質と限界を推測する。いま分かっているのは次の三点。

第一点、ルイスは他人の夢に干渉できる。

第二点、ルイスは他人を夢見る状態に留まらせることができる。

第三点、ルイスは記憶に直接干渉できない。

(夢と自覚しながら見続ける明晰夢は、驚いたり警戒したりすると目覚めてしまうそうだけれど、私はいまだに夢の中にいる。麻酔が解けない限り脱出は不可能、ということかしら——まあ、いまのところは安全そうだし、こうして警戒できるのだから、取り敢えず問題は無いわね。それよりいま一番確認しておきたいのは、彼女が私の思考を読み取れるかどうか、だけれど……)

涼しげな微笑みの裏で密かに冷や汗を掻いていると、

「そうねえ、自信の表れと取っていただけると幸いだわ」

桃色の髪の少女が再び柔らかく微笑み——世界が変わった。

認識できる空間が広がり、知覚できる情報がさらに精密になって——。

「こ……これは!？」

「私の能力（ナイトメア）は、対象の夢に干渉して固定化・詳細化するだけじゃない。対象の夢にゲストとして、他人を招待できるのよ……って、どうしたの？ 頭痛いの？」

「あー、いえ。そういえば自分から能力を説明するのがこの世界のお約束でしたわね」

怪訝な顔をする少女に溜め息混じりに応じながら、響めっ面でコメカミを押さえていた信秀はわずかに首を振った。タイトルが『ノブナガッ!』ではなく『ノブヒデッ!』でも、シリアス風味にはならないらしい。

「私の趣味とは少々異なりますが、まあいいでしょう。それで？ 私の夢の中に教室を再現し、西開の生徒を招待して、いったいなにをしようというのです？」

気を取り直して顔を上げた信秀は、新しく拡張された世界を見回しながら夢魔使いの少女に尋ねた。さほど広くない生徒会長室は見慣れた教室に変わり、いくつかの席には男子生徒が腰掛けていて、教壇上で対峙している信秀とルイスをジッと見つめている。

（……あまり好ましい気配ではありませんね）

夢の中だからなのか、ゲストたちの感情をヒシヒシと感じる。最初から目を血走らせ、鼻息を荒らげて、麗しき生徒会長を密かに視姦しているのだ。

スカートの上から尻の大きさが測られ、制服越しに乳房の丸みが愛でられる。長く艶やかなストレートの黒髪、いつも涼しげに微笑んでいる目元、唇——欲望を乗せた粘つくような眼差しが、身体中を無遠慮に這い回る。

いつものことだ。慣れている。

生徒会長という目立つ地位にあれば、どうしても注目を集めてしまう。

ただ——視線を物理的な刺戟として明確に知覚したのは、初めての経験。視姦とはよく言ったものだ。身体中に小さな指が這い回っているような——服の中に這い込んできた舌に、柔肌をピチヨピチヨ舐められているような——気持ち悪い。おぞましい。

あまりの不快さに、身体が振れそうになる。

一方、ルイスは愉しげな表情を取り戻し、

「最初に言ったでしょう？ 私は貴女とお友達になりたいの。それも、ただのお友達じゃなくて、心の深い部分で繋がった親友ってモノに」

状況とそぐわない答えを吐く。

どう言い繕おうと、教室に満ち満ちている剣呑な気配は隠せない。要するにコレは脅迫だろう。なのにヌケヌケと「友達になりたい」とは——天使のように愛らしい外見とは正

反対に、ルイスと名乗った少女の心性はかなり禍々しいようだ。

静かに昂奮しているゲストたちの粘つく視線を無視し、眼鏡のつるをツイッと押し上げて冷ややかな表情を作る信秀。

「人間でない貴女が、私と友達に？ なにやらキナ臭いお話ですわね」

「いやあん、そんなに警戒しないで……って、えっ!? わ、私が人間でないって……ちょっと待っ……いつ、どうして気づいたの!?!」

聖ジョウント学園の制服に包まれた薄い胸や小さな尻を撫で回しつつ、ルイスは本気で焦っていた。もしかして、とカマをかけてみただけなのに、なんとも分かりやすい。

(……いやまあ、戦いやすいのですからよしとしましょう)

ガチガチの心理戦を想定してかなり身構えていた信秀は、拍子抜けしかけた心を前向きに引き締め、漏れそうになった溜め息の代わりに勝ち誇った笑みを浮かべた。

オマヌケな相手でも心理戦は心理戦だ。仕草、表情、語彙や口調のひとつひとつが武器になるし罠にもなる。相手のフィールド上から脱出できたわけでもないし、いまここで気を抜くわけにはいかない。

「気配……ですわね。現実世界で貴女と対面した場合、同じように見抜けるかどうかは分からないけれど、少なくともいま・ここではハッキリと分かります。ガサツな妹と違って、私は気の流れや超能力の気配に敏感なのですよ」

「く……っ！」

人形のように可愛い顔を悔しげに歪め、拳を握り締めるルイス。ギラつく瞳を見なくても、フツフツと煮え滾る怒気が熱い波となって押し寄せてくる。

（このヒトは……自分の力の効果や限界を、正確に把握していないわね。夢世界は所詮、意識だけの世界。心の動きが世界に影響を及ぼすのは当たり前のこと——なのに、感情をコントロールしようとしなない）

そこまで読んだ信秀は、逆転までのシナリオを一気に書き上げる。ルイスの能力には、その効果から必然的に生じる欠点がある。それを確かめるため、信秀は視線を教室の隅へ向け——妹・織田〈希莉香〉（きりか）信長（のぶなが）の姿を見つけた。

これは必然。そして、推測通りなら——逸る気持ちを抑え、何事もなかったような顔でルイスへ視線を戻す。

「北宮（きたみや）や聖ジョウントへ浸透しているアナタたち……ええっと、なんとお呼びすればいいのかしら？ 黒山羊教徒？ マレビト？ 深淵より来りし者？」

「……好きなように呼びなさいよ」

「では、マレビトで。アナタたちマレビトはどうやら人間にとって好ましくない存在のようですが、それがなぜ、私と友誼を結びたいと？」

「ふん！ もう分かかってるんでしょう？ 顔に書いてあるわよ」

「では答え合わせをしましょう。生徒会長である私を取り込んで橋頭堡とし、いまだに浸透工作が成功していない西開に仲間を入れる……どうです？」

「御名答。それならば、色よい返事をもらえなかった場合に私がどんなことをするかも、すでに分かっているわね？」

フテ腐れていたルイスが勝ち気な笑みを取り戻し、再び攻撃に転じる気配。

受ける信秀は不快そうに唇を尖らせてみせ——その実、安堵の吐息をソツとこぼす。
(思った通り、ですね……これなら勝てます)

教室の隅、机の上に両脚を乗せてつまらなさそうに窓の外を見ている学ラン姿の妹は、いまだにルイスに気づかれていない。これで〈ナイトメア〉の欠点が証明された。

あとは、反撃の機会を待つだけ。

桃色の髪の少女がどれほどオママケでも、反撃されれば学習するだろう。欠点を自覚されたら勝ち目はなくなる。だから、チャンスは一度。

(さて、どうしますか……)

深呼吸して気持ちを落ち着けた信秀は、いままでの思考をパッキングして頭の隅へ追いやり——ルイスにニッコリと微笑みかけた。

「ゲストとして呼び込んだ彼らを使って、私を犯す……のですね。でも、ひとつだけどうしても分からないことがあります。答えていただけますか？」

「なによ？　言ってみなさいよ」

「これは夢なのでしょう？　夢の中でいくら犯されようと、現実世界の私はまったく傷つかないはず……貴女が企んでいる脅迫は、成立しないのでは？」

「そう来ると思ったわ」

待ってましたとばかりに、ルイスが兇悪に笑う。

「よく考えてみて。夢も現実も、脳が認識して初めて存在するのよ。脳にしてみれば、夢と現実の間に本質的な差はない」

「唯脳論ですね。それで？」

「しかし通常は、夢と現実はもちろんと区別できる——なぜなのか？　それは、情報量に差があるからよ。現実の情報量っていうのは圧倒的に多いの。ここで質問。現実と見分けがつかないほど詳細な夢を見た場合、脳はそれを夢と認識するかしら？」

「……ああ、なるほど。迂闊でしたわ」

涼しげに微笑む信秀の頬に、ツウツと冷や汗が垂れた。

ルイスが新たなゲストを呼び込んでいるのか、世界がどんどん拡張していく気配。

確認しようのないことだが、夢世界での「情報量」はどうやら、妄想の和に正比例するようだ。ゲストが増えれば増えるほど質感や量感が増し、微かな匂い、わずかな息遣いまで感じられるようになる。

いつの間にか、夢を見ているという感覚は消えていた。気がつけば掌が汗ばみ、微風に潮の香を嗅ぐ。

当然、視姦の質も現実感を増した。黒髪に隠れた耳朵が蠢く舌にねつとりと舐られ、衣服に守られているはずの乳首が幻の指に弄ばれる。揉まれる乳房、撫で回される尻——秘裂にも芋虫のような感覚がモゾモゾと這い込んできて、敏感な花卉や感じやすい肉豆が無遠慮にまさぐられる。

ルイスは「現実と変わらない」と言うが、違う。

情報量は現実並だが、そのうえ男たちの欲望がダイレクトに伝わってくるのだから、現実より遙かにタチが悪い。

「さあ、どうする？ 私の友情を拒否して男のコたちに犯される？ 予め言っておくけど、貴女にとってはほぼ現実でもゲストひとりひとりにとってはあくまで夢。自制なんて効かないから、グッチョングッチョンのネッチョンネッチョンに犯されちゃうわよ」

「それは困りましたねえ……ですが、ひとつ忘れていませんか？ 私がダメになっても、西開にはまだ信頼できる人材がいます。私が彼に生徒会長の席を譲れば、貴女の計画は頓挫しますよ？」

本当は彼ではなく彼女たち——島津^{しまづ}六姉妹という潔癖性の逸材なのだが、手がかりを与えないために敢えて情報をズラした。

さらに――。

「あっ!? ま、まさか……そんなあっ!!」

おぞましい感覚は股間、お漏らしによつてグッチョリ濡れたショーツの中にも生じ始めた。親指ほどの太さ、長さの「なにか」が、細かな擬肢を小刻みに動かしつつ敏感な割れ目を這い回る。柔らかな肉畝が揉みまくられ、繊細な肉ピラにもプリプリした感覚が這う。(なんていやらしい……ッ!)

歯噛みした信秀は片方の手を胸に残し、もう片方を股間へ伸ばした。

頬に視線を感じる。居並ぶ全校生徒にジロジロと見つめられている――しかし。

(これは夢よ、現実ではない。恥ずかしの必要はないわ!)

理性的に割りきって、スカートを捲った。

――おおっ!

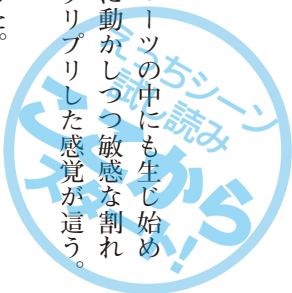
グラウンドに整列した生徒たちがどよめく。下品な口笛も聞こえる。

「うう……ッ!」

あまりにもリアルな反応、気配。

夢なのだ、現実ではないのだ、といくら自分に言い聞かせても、心はどうしようもなく竦む。爆発する羞恥に頬が赤らみ腰が抜け、膝がカクカク震えてしまう。

しかも、余裕はない。



羞じらう美少女が躊躇っているうちにも下着の中の軟体動物はさらに増え、小水に濡れた肉畝が蠢く擬肢に蹂躪される。潤んだ割れ目に硬い頭部をねじ込んで、

「くっ!? あ……ううっ!」

繊細な粘膜花卉が小さな牙に甘噛みされる。

突き刺さる痛み——いや、弾ける快感。

「はう……ッ!? な、なぜ……あううっ!」

チクンチクンと繰り返される微かな痛みが、なぜか気持ちいい。潰すと噴き出す体液と同じように、牙の先から出る毒に催淫成分が含まれているのか。

手を被せたショーツの中、愛蜜に濡れた淫唇が軽く噛まれるたびに、ミニスカートに包まれた腰が鋭く退けてくの字に折れた身体がビクッと跳ねる。

「信秀さん、どうしたんだ?」

「顔が紅いな。それに……なんかいやらしい表情だ」

ざわめく生徒たちの声が、切れ切れに届いた。あまりにも夢らしくない、リアルな声。

「さつきから胸を揉んだり股を弄ったり……ひよつとして、オナニーしてるの?」

「やだ、ウソお!? あの信秀さんが、そんなことするわけないでしょ?」

ときおり混じる少女の声には、隠しようのない嘲りの響き。眉目秀麗、文武両道の美少女にはファンも多いが、嫉妬や羨望に胸を焦がしている敵も同じくらい多いのだ。

いつも涼しげに微笑んでいる生徒会長を、衆人環視の中で辱めたい、人外の悦びに悶え狂わせてみたい——そう思っているのは男子だけではなく。少なからぬ少女が、あまりにも完璧な信秀を引きずり墮としたいと常日頃から欲望している。

だから——。

「ふ……あつ!? ダメ……あンッ!」

秘裂内部の感触も詳細に再現されていた。

詳細ではあるが、リアルではない。何十人、何百人のオナニーや性戯の記憶がまとめて投影されているのだから、リアル以上。

無数の蛞蝓に掻き分けられた淫唇に、心地よい火花がパチパチと弾ける。愛液に潤んだ膣穴に振動する頭部が押し当てられ、

「うう、ああつ!? は、入って……くるうっ!!」

こじ開けられる気配。

慌てて身体を折り曲げ、股間に添えた指先に力を込めた。傍若無人に振る舞っていた蛞蝓たちは一際激しく暴れつつ——プチプチと潰れて、催淫液を撒き散らす。

(あ……し、しまった……!)

いやらしい畏だ、と気づいたときにはもう遅い。

不気味な蟲に弄り回され感度を増した粘膜花卉が、一気に燃え上がった。火照る割れ目

の縁でクリトリスが痼る。最後まで責められていた膣穴がこらえがたく疼き、

「ひ……ひ、ひいっ！」

羞恥の悲鳴を上げながら朝礼台の上にへたり込む信秀。

実際の身体であればこんな感じになかったかもしれないが、いまは観客の欲望に応じていくらでも淫らさを増す厄介な仮体。目の前に整列した生徒たちが望むまま、妖しい体液に濡れた粘膜花弁が燃える。ジクジクと疼く。

それでも――。

（た、耐えなければ……こんな恥ずかしい姿、いくら夢の中とはいえ……）

震える唇を噛み、拳を硬く握り締めて、信秀は耐える。

ルイスが言った通りだ。現実だろうが夢だろうが、恥ずかしいものは恥ずかしい。

もちろん、恥ずかしがるだけではどうにもならない。ひとりの信秀に対して観客は千人以上。夢という特殊な環境下、理性のブレーキがまったく効かない欲望が束になり、ぬめる蟲と化して美少女の股間を襲う。

「はう……く、うう……」

押しえた手の下、濡れた下着の内側で、小指くらいの大きさの軟体がクニクニクニ――蜂蜜に濡れた無数の指に、恥ずかしい肉畝が揉みくちやにされているようだ。産みつけられる淡い快感を恥じ、ギョツと握り潰すと、催淫粘液が噴き出してさらに感度が増す。

潰れた蟲も、死ぬわけではない。

さらに細かく分かれ、ピチピチとくねる糸蚯蚓の群れとなって、割れ目の中へ容赦なく這い込んでくる。愛蜜に潤んだ肉ビラの上を、傍若無人に這い回る。

もうダメだ、我慢できない。下着越しでは物足りない。

(夢……夢なのだから、いいの……は、恥ずかしくない、の……！)

羞じらう気持ちに言い訳した信秀は、ついにショーツの中へ手をつ突っ込んでしまった。肉畝に這い回っていた無数の蟲は、なぜか指に感じない。

しかしそれを疑問に思う余裕は、もう残っていない。

「ああ、ううっ！」

焼きつきそうに疼いている媚肉を自らの指で揉み慰めて、甘やかな声をこぼす信秀。

小水と愛蜜、催淫液にぬめる秘裂をクチュクチュクチュ——弾けんばかりに痼り勃ったクリトリスを掴み、捏ねて——。

「い……イイツ！」

弾ける悦びに背を反らせ、長い黒髪を振り乱してあられもなく嘶く。

(ああ、なんていやらしい、声……)

羞じらう間も手は止まらない。

鉤に曲げた指先で粘膜花卉を搔き鳴らせば、熱い細波が膣洞を伝って子宮に響く。

親指の側面で淫核を捏ね潰せば、

「ひう……ひう、ひいいうんツ！」

矢のように鋭い快感が股間から脳天へ突き抜け、恥ずかしい鳴き声がとめどなく漏れる。

「うわあ、こんなにたくさんのヒトの前で、生徒会長がオナニーしてるうっ！」

「朝礼なのに、なに考えてるのかしら」

容赦のない嘲笑を浴びせられても、悔しいとか恥ずかしいとか思う余裕はなかった。

自らの指で熱く潤んだ肉ピラをぬちゅぬちゅとしごき、痺れるような快感を次々と産みつけているから、紅く染まった信秀の頬には蕩ける笑みしか浮かばない。

「だ、ダメ……や……止まらない、止まらないのおおっ！」

疼く秘裂を掻き回し、もう片方の手で弾む乳房を揉みくちやにして、遙かな虚空へ舞い上がっていく黒髪の美少女。

爽やかな初夏の朝。

たくさんのヒトに見守られている朝礼の場。

「見ないで、お願い……見ないで、見ないで、見ない……でえっ！」

夢と現実の境が消えていく。

理性が焼き切れてしまいそうなほど恥ずかしい。

なのに、ショーツの中に挿し込んだ指は止められない。

それどころか、ますます激しく淫唇を掴み、しごき——。

クリトリスを捏ね回し、膣穴をヌポヌポと抉って——。

「ああ、ああダメ、ダメダメ……イク、イクイク……また、イクう——ツ!!」

——ビクン、ビククンッ!

無数の視線を浴びながら、信秀は軽く果ててしまった。

(なんて、はずか、しい……)

恥辱と恍惚が入り混じり、仰向いた頬が弛む。

これはルイスの精神攻撃なのだ、耽っている場合ではない——頭の隅では思うのだが、全身を満たした気怠い心地よさには抗えない。

こんな陶酔感は、生まれて初めて。

身体の境界線が薄れ、溶け、消えて、魂まで流れ出ってしまったような——。

「ふ……あ、ああ……」

甘い痺れが充満した乳房をギュウツと掴んで——信秀はふと、我に返った。

掌が感じているのは滑らかな肌。

指と指の間に、硬く痼った乳首がはまり込んでいる。

「え……あっ!? は、裸……ッ!?」

ハッと我に返って見下ろせば、たわわに実った乳房が爽やかな朝陽を浴びて、白く瑞々

しく輝いていた。

胸だけではない。

ほどよく括れたウエスト、プリッと引き締まった美尻、スラリと長い太腿、脛――。

(い、いつの間に……って、これもまた、だれかの夢なの!?)

ロケーションは朝礼のまま、台の上に立っている信秀だけなぜか裸になっていた。制服はもちろん、下着も一切着けていない。

細いうなじには紅革の首輪。朝露に濡れた朝礼台を踏むのは、柔らかな素足。

ひんやりとした微風に裸の美尻がさわさわと撫で回され、男子生徒たちの熱い視線がたわわな乳房、無毛の股間に容赦なく突き刺さってくる。

「ひ……ひいつ!! いや、いやいや、見ないでえっ!」

胸と股間を手で隠し、慌てて座り込む信秀。

もう、夢か現実かと思い悩む余裕はない。

感覚的に現実ならば、信秀にとっては間違いなく現実なのだ。

「か、会長さんの……裸、裸!」

「信秀さんの生乳だあっ!」

「大きなお尻ね。ペシペシ叩いてみたいわ」

「おお! 思った通り、毛が生えてない!」

グラウンドに整然と並んでいたはずの生徒たちが、いつの間にか朝礼台の周りに群がり、羞じらう美少女の白く瑞々しい裸体をカブリツキで鑑賞していた。男子だけではなく、女子も混じっている。顔は相変わらずハッキリしないが、しかし瞳を欲望にギラつかせ、鼻息をフイゴのように荒らげているのはイヤというほど分かる。

（み、見られてる……ああ、見られてるッ！　こんなにたくさんのヒトたちに、こんなに傍から、こんなにジロジロと……!）

気が遠くなりそうな恥ずかしさに、乳首がムククツと勃起した。乳肌の裏側にこらえがたいむず痒さが広がる。小水に濡れた秘裂にも熱い疼きが湧き起こり、割れ目の端に色づいた肉豆がズキン、ズキンと疼痛を発する。

（……って、ええ!!　な、なぜ……どうして!!）

恥ずかしいのに気持ちイイという倒錯の悦びを自覚して、いつも冷静な美少女は柄にもなく混乱した。

バカな、そんなはずはない、仮体という特殊な身体が他人の妄想に影響されて快感を覚えているだけだ——そう思う一方で、こんなにドキドキするのは初めてだ、羞恥に煮え立つた頭がポオツとして、なにもかもがどうでもよくなるほど気持ちイイ、と新たな境地を受け入れてしまう自分を感じる。

「み、見ない、でえ……!!」

振り絞る声が甘い。

もっともっと見て欲しい、もっともっと視線を浴びたい——早鐘を打つ胸の奥から歪んだ欲望が湧き起こり、朝礼台の上に蹲った身体のあちこちへ、じわり、じわりと染み広がっていく。

「見ないでって言われても、なあ？」

「生徒会長のウンチの穴、さつきからヒクヒクしてるんだけど」

「えっ!? あ……ああっ!」

笑いを含んだ声に引つ張られ、意識が尻穴に向いた途端——。

——ぞくんっ! ぞくぞくっ!

艶やかな黒髪が広がる背筋に悦びが駆け抜け、膝立ちの姿勢で振り返った。

仰向く胸に乳房が弾み、押さえた腕からこぼれ出る。

手で隠していた秘裂が燃えるように熱くなり——。

(夢……夢なの……これは、夢なのお!)

羞じらう心に言い聞かせつつ、とうとうひとりエッチを始めてしまう信秀。

ルイスに与えられた仮体は、もはや少年たちの操り人形だった。

群がる少年たちに向けて膝を開き、マシユマロのような土手肉の狭間に白魚のような細指を挿し込んで、甘蜜に濡れた淫唇をクチュリクチュリと掻き鳴らす。

「あうっ!? や、やだ、声が……ああ、ンううっ!」

他人の妄想の影響を受けているせいなのか、それとも本当に、見られて興奮するヘンタイだったのか——いまにも喰いついてきそうな少年たちの不躰な視線を感じた肉ビラは、いつも以上に敏感だった。

縁を軽くしごくだけでも背筋に電流が駆け抜ける。濡れた粘膜を軽く抓み、キュッキュツとしごけば、肉芯に淫欲の炎が燃え立つて頭の中が真っ白になる。

眼差しを受けて昂るのは秘裂だけではなかった。

「酸欠状態の金魚みたいに喘いでいるな。指を突っ込んだらどうなるんだろう?」
興味津々に見つめられている尻穴が、こらえがたく疼く。

「うはあ……あんなに弾むんだ、オッパイ」

タプンタプンと跳ね躍る形よい巨乳が、無数の視線を浴びてそわそわする。

(ち、乳首が……うう、くうう……ッ!)

全体が性感帯と化している胸乳の中、元から敏感な肉豆は一際狂おしく欲情していた。弾けんばかりに勃起している。ピンピンに張り詰め、赤々と輝いている。

恥ずかしい、しかし耐えきれない——耐えきる信秀を、だれも望んでいない。

「ゆ、夢なの……夢の中だから、なにをしたって、いいのお!」

自分自身に言い訳して、信秀は右の乳首をキュツと抓んだ。

その、瞬間——。

「アひうッ!？」

胸先から乳腺を駆け抜けて乳奥に突き立つ、快感の槍。

反り返る背筋を陶醉の熱風が駆け抜けて、理性の籬が弾け飛ぶ。

(夢、夢……気持ちイイッ!)

眼鏡の下、紅く染まった頬を法悦の涙で濡らしつつ、淫らに微笑んだ黒髪の美少女はカクンカクンと腰を振った。

少年たちの欲望には逆らえないし、これはそもそも夢なのだ。

我慢する必要はない、我慢しなくてもいい——必死に言い訳しながら、信秀はこらえがたい淫悦の嵐に身を委ねた。

朝陽を浴びた朝礼台の上、白く瑞々しい桃尻を牝犬のように振りながら、熱くぬめるピラピラを、泳ぐようにくねる指先で弾き、掻き回す。痛いほどに勃起したクリトリスを親指の腹で押さえ、小刻みにしごく。

「やだ、なにしているの会長？ 変なスイッチが入っちゃった？」

「なんだよ、信秀さんって見られるのが好きなヘンタイだったのか？ 幻滅だな」

嘲りを受け、忘れかけていた恥ずかしさが一気にぶり返したが、しかしそれも倒錯悦のスパイスにしかならない。

(したくてしてるのでは、ない……だれかがこういう私を、見たがっている、から……) 無遠慮に見つめられている乳房が燃える。

弾む肉丘の尖端で、真つ赤な乳首がズキズキと疼く——と。

「そ……そうなの、私……ヘンタイなおおっ！」

だれかに操られた口が、淫らな笑みを浮かべつつ勝手にカミングアウトした。

(ち、違うッ！ いまのは私じゃ……あっ!?)

慌てて言い訳しようとしたが、声が出るより先に、操り人形と化した裸体が朝礼台にガバツと伏せる。

「ふあ……」

思わず漏れる恥ずかしい吐息。

滑り止め用の細かな模様が浮き彫りされた鉄板の、硬い冷たさが、火照る乳肌気持ちよかつたのだ。

(な、なにしてるの、私……ああでも、胸が……胸がああっ！)

羞じらう理性を置き去りにして、欲情した女体が動き出す。

——ムギユリ、ムギユリ。

前後する胸の下、柔らかく潰れた乳房が捏ね回される。

「あふ、ああ……おっぱ、イイイッ！」

滑り止め用のモールドに乳首がクニクニ捏ね回されて、次々弾ける心地よい火花。圧されるままに形を変える胸の双球が、たちまち肉悦の塊になっていく。

（なにコレ、なにコレ……き、気持ち、イイツ!! 恥ずかしい、でも、止められない……か、身体が、勝手に……動いちや、うううっ!）

細い身体全体を揺らし、冷たく硬い鉄板に火照る乳房を押しつけながら、裸の美少女は桃の実のような美尻を高々と突き上げる。

操られての動きではない。

高まる淫悦に促され、女体が自然に姿勢を変えたのだ。

もちろんそれは、牡を誘う牝のポーズ。

「うわ、なんてはしたない格好だ。そんなにケツの穴を見せびらかしたいのか?」
いやらしい少年に嘲笑われ、キツと唇を噛んだつもりだったのに――。

「そ、そうよ……そうなのよおっ!」

自分の言葉ではなく望まれている媚声が、上擦りながら迸ってしまふ。

（違う、違う違う! いまのは、私じゃないッ!）

胸の内でもんなに否定しても、鼻息を荒らげた観客たちには伝わらない。

「見て、見て……私の恥ずかしい姿を、もつと、もつと……見てえっ!」

淫らに裏返る美少女の春声に誘われて、瑞々しい尻肌にくくちく刺さる無数の視線。

ジツと見つめられる肛門、容赦なく覗き込まれる秘裂——。

「お、お願い……もつと、もつと奥まで……あうんッ！ ほら、見て……希莉子のオマ○コ、グチヨグチヨなの……奥が疼くの、ジリジリしてるのおおっ！」

股間に伸ばした両手で柔らかな肉畝を掻き開き、滑る淫唇を不器用に抓んで、愛蜜に濡れた膣穴の奥まで視線を導き入れてしまう信秀。

（だれ？ だれなのっ?! いったいだれが、こんな……ああダメ、おかしく、なるう！）
触れる悦び、揉み歪める快感より、見られる恥ずかしさのほうが気持ちいい。

こんなヘンタイ的な恍惚は、絶対に自分のモノではない。きっとだれか別の人間の、おぞましく歪んだ欲望が反映されているのだ——しかし。

「うう、ああ……蕩けちゃう、蕩けちゃううっ！」
見られる快感は実際にある。

羞じらいに起因したためくるめく陶醉が、肉悦よりも遙かに熱く、甘やかに、信秀の理性を侵蝕していく。

もはや、恥ずかしいのに気持ちいい、ではない。

ザラつく鉄板に頬を擦りつけ、眩いほどに瑞々しい桃尻を振り立てて自慰に耽る信秀にとって、羞恥こそが快感だった。

このままいきたい。

みんなの前で牝猫のように泣き叫び、痴態の限りを尽くしたい。

(そ、そうすれば、もっと……もっともっと、恥ずかしくなる!)
さらなる倒錯悦を求め、

「お願い、見て……もっと、もっと……いやらしい私を、全部、全部……見てええっ!」
淫らに熟れた秘裂を細指で開く。

桃尻を突き上げ、上下左右に激しく振って、群がる野次馬の視線を執拗に誘う。

「うはあ、本当にヌチヨヌチヨじゃないか。いやらしいなあ会長は」

「見られてあんなに濡らすなんて、サイテー!」
嘲笑を浴び、

「あ、あ……あにやあああっ!」

ついに羞恥が爆発。

頭の中が真っ白になり、裸の背筋がビクビクッと震えて――。

「れ、れる、れるれる……オシッコ、れるよおっ!」

ピュルッ! ピュルル、ぷっしやああ――ッ!!

淫らに微笑み、舌足らずな声で叫んだ信秀は、白い裸体に初夏の朝日を浴びながら居並ぶ生徒たちに向けて勢いよく放尿した。

(も……もう、ダメ……気持ちよすぎて、ワケが、分からない……)

肉畝を超え——潤みの底で喘いでいた膣穴も、淫唇を外へ外へと引つ張られている影響で目一杯開いてしまう。

「うふふ、ヒクヒクしているわね。可愛い。入り口の周りは濡れ濡れだけれど、奥はどうなっているのかしら？」

信秀の股間を覗き込むルイスの口から、ずるり、と白っぽい肉紐が伸びた。舌が変形し、触手になったのだらう。初めはツルンとしていたソレが、みるみるうちにいくつもの珠になる。複雑に絡んだ数珠のような、あるいは捻れて纏れたトウモロコシのような——。

「ひ……ひいっ!!」

おぞまじさに息を呑んでいるうちに、乳谷越しに見えるソレには黒い斑点がいくつも浮かび——いや、違う。眼球だ。触手の表面に浮き上がった丸みのひとつひとつに、虹彩と瞳孔が生じたのだ。

(し、視線が……ああ、視線があっ！)

繊細な淫唇にゾワゾワと這い回る、無数の眼差し。

あまりの気持ち悪さに鳥肌が立ち、意識が遠退きかける。

「中を観察するわよ」

「や、や……やめ……てええっ！」

拒否する叫びは無視され、無防備な膣穴がグリッと穿られた。

(あう……ッ!!)

ゾクゾクツと背を駆け抜ける悪寒、それを追い抜いていく熱い細波。

(な……なに? いまの、なに……!?)

気持ち悪いはずなのに、気持ちよかった。

黒い瞳孔を持つ目玉のひとつひとは粘液に濡れ、見た目以上によく滑る。予測不能の快感が押し潰された淫唇に弾け、恐怖に強張った膣穴が肉の悦びに弛緩する。

「うろう……くろう……」

——モキュ、モキュ、モキュキュッ!

抗いがたい淫悦を産みつけながら、眼球状の瘤がひとつ、またひとつ、処女膣穴へ潜り込んできた。

「くふ……う……ンううっ!」

壺口に感じる、滑らかな丸み。

粘液にぬめるゴム球のような、硬い弾力。

(は、入って、くるう……入って、くるううっ!)

生まれて初めて胎内に感じる、明らかな異物。普通のペニスであつても平静ではいられないだろうに、いまムリムリと押し入ってくるのは目玉の群れだ。

「いや、いや……やめて、いやあああっ!」

迸る悲鳴、振れる身体。

しかし異様な触手は容赦なく、狭い腔穴をこじ開けてムリ、ムリ、と押し入ってくる。さらに――。

(な……なに？ なにコレ……ああ、変ッ！ 熱い、と、蕩け……るうッ!?)

限界以上に伸びきった蜜壺の奥に、煮え立つ快感が生じた。太い淫肉に押し潰された腔膜が、甘やかな電流を発して痺れていく。

気持ち悪い物体に大切な場所を犯されているというのに、振れる背筋を心地よい細波が駆け抜けていく。ふう、はあ、と喘ぐ声に淫らな響きが混じり、苦痛に強張っていたはずの頬が閃く恍惚に弛んでしまう。

クリトリスや乳首を弄られたときのような鋭さは、ない。

淫唇をしごかれたときにジワジワと染み広がる、我を忘れるような細波とも微妙に違う。(と、蕩け、るう……し、痺れ……るう……ッ!)

そのどちらでもあり、どちらとも違うような、不思議な感覚。

強いて例を挙げるなら、歯の治療の際、歯茎に麻酔を打たれたときのような――自分の身体の一部が自分のモノではなくなってしまったような、不安を伴ったもどかしい快感。

「や、やだ……ああ、そ、そんな……奥、までえっ!?!」

大きさの違うゴム球を適当にまとめて棒状に形成したような触手が、ズン、ズン、と打

ち込まれる。淫悦を発していやらしく潤む膣穴の、奥へ、奥へ――。

柔らかな下腹が裏側から突き上げられて、モコリモコリと波打った。硬く丸くコブコブとした感触が、処女肉穴を強引に掻き分けつつ、ヘソの裏側へ近づいてくる。

仮体だからか、破瓜の痛みはない。

その代わり、痺れるような蕩けるような、なんとも言えない肉悦が、いくつも連なる滑らかな丸みに押し潰された膣壁に、ひっきりなしに湧き起こる。

「うわお！　すごおいつ！　細かな褻がビツシリと生えていて、複雑な模様を描いているわ。こういうの、蚯蚓千匹つて言うんでしょう？」

触手の視覚が捉えた膣内の様子を、ルイスが無邪気な声で伝えてきた。

「し、知りませんッ！」

反射的に言い返したものの、信秀は知っている。

俗に言う、名器の条件だ。

（私の中って、そんなに、いやらしい……の？　こ、こんな気持ち悪い触手を気持ちよく感じてしまうのも、わ、私の身体が、いやらしい……から？）

自分ですら知らなかった恥ずかしい秘密をバラされて、信秀は息が止まるほど恥じた。腐肉色の胴体に少女の顔を滑らせたルイスが、嵩にかかって追い討ちをかける。

「細かなヒダヒダが、あはは、躍ってる躍ってる！　紅くて細くてゾワゾワしてて、確か

にコレは蚯蚓の群れみたいね」

「く……ううっ！」

「しかも……うふふ。エッチな汁がジュワジュワ湧いてきたわ。私の目玉オチンチンを、信秀のいやらしい処女オマ○コが歓迎しているのね！」

「言わないで……言わないでええっ！」

ルイスに説明されなくても、すでに自覚していた。

胎内へ押し入ってきたコブコブした塊に、波打つ腔洞がヒタツと寄り添い、絞るようにしゃぶるように蠢いている。

（こ、こんなに、太い……こんなに、か、硬、い……ッ！）

知りたくないのに知ってしまった、異形の感触。

深々と貫かれ、しつかりと繋がって——しかも身体は、我を忘れるほどに悦んでいる。

「なにカマトトぶってるのよ？ ほら、コレ……」

「あひっ!? あ、あ……うううっ！」

生臭い粘液を垂らす触手が伸びて、弾む胸先、真っ赤に痲つた勃起乳首にニユルツと巻きついてきた。火照る巨乳に悦感が反響、左右の乳房が燃えるように熱くなる。

「くうっ!? あはは、信秀のエッチなオマ○コが、私のオチンチンをキュツと締めつけてきたわ！ 乳首でこんな風になるなら、クリトリスにした場合は……」

「え……あつ!! ダメダメ、やめて、ダメ……あひいっ!」

敏感な肉豆が小さな吸盤に呑み込まれ、チュウウツ! と鋭く吸い立てられた。

化け物に押さえ込まれた身体が快感に打ち抜かれ、おぞましい触手に貫かれた膣穴がギユチチツと捻れる。

「あ、あ……ああああつ!」

連なる目玉のひとつひとつに柔らかなヒダヒダが密着し、愛液をジュプジュプと滲ませながらいやらしく潰された。膣洞を埋め尽くした異物の太さや形、長さなどを、脳裏に思い描けるほどまざまざと実感してしまう。

（気持ち悪い、気持ち悪いのよ、コレは……こんなの、気持ちイイはずが、ない……!）
——のに。

ズン、ズン——ズズンツ!

「はうツ!? あう、あ……あああつ!」

硬い切っ先に子宮口を突き上げられ、杭のように太い悦感がヘソの裏側——子宮まで突き抜けてきた。

「やめて、イヤ……いやあああつ!」

意思に反して跳ねる身体。

背を駆け抜けていく心地よい突風。

(き、もち……イイ……ッ！)

硬い丸みに押し潰された膣壁が、甘く痺れて蕩けてしまう。

股間を突き上げ乳房を揺らし、眼鏡の下では切れ長の瞳が恍惚に潤み、焦点を失いながらうっとり細められる。

「イイ声が出たわね。ココがいいの？」

「はうっ!? はう……は、は……はうンッ！」

硬く滑らかな丸みに膣奥を突かれ、突かれ、また突かれた。こじ開けられそうな子宮口が熱く痺れ、その悦感はずわじわと、子宮の中にまで響いてくる。

初めて異物を受け入れた膣壁は、わずかに前後する瘤の群れに押し潰され、細かな溝に溜めていた愛液をジュチ、ジュチ、と絞り出された。

蹂躪、されている——胎内をおぞましい肉棒に、グチグチと掻き回されている——。

怒るべきだ、憤るべきだ、とわずかに残った理性が叫ぶのに、

「にやふ……はひ……あううっ！」

信秀はもう、仔猫のような鳴き声しか漏らせない。

膣奥を突き揺すられる快感が子宮で反響・増幅され、熱い津波となつて背を駆け抜けるのだ。意識をトロトロに溶かす肉悦の荒波には、クリトリスや乳首、淫唇に生じている鋭い快感も入り混じっている。

「や、やらああ……お、お、墮ち……るううっ！」

背に感じていた床がいつの間にか消えて、奈落の底へ延々と墮ち続けているような感覚に包まれていた。この世界は信秀の意識がベースだから、信秀が墮ちると思えば墮ちる。どこまでもどこまでも、際限なく墮ちていく。

「いいわ、墮ちなさい！ もっともつと墮ちなさいッ！」

勝利を確信したルイスが、すべての触手をブルルッと震わせた。いままでオアズケしていた右の乳首にも、小さな吸盤をヌポッと被せる。

「あひうっん!! あひ、あひ……あひいっ！」

左右の乳首とクリトリスが、ちゅっちゅっ、ちゅっちゅっとりズミカルに吸い立てられて、臆奥を突かれる悦びがさらに加速。

「ら、ら……らえええっ！ イイ、イイ……気持ち、よすぎいいっ！ ふあっ!! や、やら、やらやら、そこはあ……お、お、お尻いいいいっ！」

逆さになった信秀の身体にいくつもの触手が巻きつき、その尖端がムッチリとした尻房を揉みながら恥ずかしい肛門へ這い寄ってきた。

「いや、やら……き、汚い、よおおっ!!」

「でも、信秀はいやらしい仔だから、ちゃんと感じるんでしょう？」

「あうっ!! あうう、あううっ！」

指先程度の大きさの亀頭が数十個ほど、ぬめる表面をヌチヌチと摺りあわせながら穢れの肉孔に殺到する。先を争ういやらしい触手たちによつて菊膜が揉みまくられ、しごき立てられ、羞じらいに緊張した括約筋が蕩けるほどに解されていく。

「ほうら、柔らかくなつてきた。信秀は可愛いから、汚いお尻の穴もいやらしいオマ○コと同じように虐めてあげる」

「や……や、やあああつ！ 無理、無理いいつ！ お尻にそんな、そ、そんな……あ、あ……ああああつ！」

瘤々とした肉棒が、引き攣る括約筋をこじ開けてムリ、ムリ、と押し入つてきた。

痛みは感じず、いきなり肛悦。

熱い痺れが細波となり、尻穴から左右の尻房へ染み広がる。

「大丈夫、入るわよ。信秀はいやらしい仔豚ちゃんなんだから」

「ち、ちが……違う……違うううつ！」

——ヌポポッ！

太くて硬い感触が、尻穴の奥に一気に潜り込む。膣と直腸を隔てる繊細な肉膜が、二本のゴツゴツとした淫棒に挟まれ、揉み潰される。

「つりゃあああ、え、え……ええええつつ！」

背を駆け抜けて脳天を突き抜けていく肉悦の津波が、いつそう激しくなった。前後の肉

孔を犯した淫棒がヌボボッ！ヌボボッ！と真つ赤な粘膜を捲り返して競うように出入りし、意識が真つ白になるほどの激感が次々と炸裂。

「やら、やら、やらあああつ！壊れちゃう壊れちゃう、壊れちゃうよおつ！き、気持ち、よすぎて、希莉子……こ、こ、壊れちゃ、あああつ！あああつ！あう、あう、あうううううつ！」

法悦の涙をこぼしてもがく女体にゾワゾワ、ニユルニユルと無数の触手が群がった。細い二の腕に巻きつき、敏感な腋窪に小さな亀頭を擦りつける。振れる腰に絡みつき、葡萄の房のようになった尖端で可愛いヘソを穿る。

「にゃひっ!! あ、あ、あにゃああ……ッ！」

絶頂が近いのか、なんでもない場所までが性感帯になっていた。

イボつきの肉紐にギュチと締め上げられた太腿が気持ちいい。震える亀頭が這い回り、冷たいぬめりを擦りつけられた頬にも、蕩けるような感覚が湧く。

喉も、耳裏も、手や足の指でさえも——小さな吸盤にムチュツと吸われれば稲光のような快感が弾け、

「はひう、ひう、ひううつ！」

ただでさえ上擦っていた呼吸がさらに乱れる。

螺旋に巻きつく肉紐に緊縛され、ムニユツ、ムニユツと歪んではみ出している乳肌には、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>